



図書館屋上より見た法学部研究棟

會報

東北大学法学部同窓会

第 11 号
 発行所
 東北大学法学部同窓会
 発行日
 昭和 59 年 7 月 10 日
 印刷所
 (株) きた出版



川内だより

会長 宮田光雄

東北大学に法文学部が創設されたころ、若い先生方のあいだで仙台を「日本のハイデルベルク」といった考えがもたれていたといわれます。古い同窓生の皆さんは、すでにしばしばお聞き及びのことと思います。古城とネッカー河をもつ大学町ハイデルベルク―それは、たしかに当時の仙台のイメージと無縁ではなかったことでしょう。仙台は、あまりにも有名な「荒城の月」の城跡を背後に、ネッカーならぬ広瀬の清流をひかえた、わが国有数の帝国大学の町だったのですから。

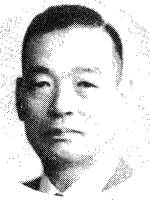
「日本のハイデルベルク」東北大学のイメージは、近來ますますはつきりしてきたのではないのでしょうか。法文学部創設のころには、まだ第二師団の所在地として仙台は軍都の名前とも結びついていました。しかし、今では、仙台は名実ともに大学町としてその存在を示しています。

現在、東北大学の主要キャンパスは元師団跡の青葉山・川内地区に広がっていますし、ひところ汚染を騒がれた広瀬川も、環境対策よろしきを経て、この頃ではようやく昔ながらの姿をとり戻してきました。その清い流れの周辺は、数多い野鳥の楽園となっています。

大学についてみれば、すぐれた研究第一主義―私自身は、このことばは学生の教育を二の次にするかのような印象があつて好みませんが―の伝統が、いまなお一貫して受けつがれ、国際交流の時代の中で東北大学の名声を世界的に伝えていきます。「ハイデルベルク」の母国ドイツの大学人のあいだでも、東北大学の名前はよく知られているようです。

近來、ドイツやアメリカの財団から派遣された外国人教師を迎え、研究・教育の交流もしだいに進みつつあります。他方、わが法学部のスタッフでは、昭和五八年五月に多喜寛助教授(国際私法)がケルン大学から、昭和五九年三月に青井秀夫教授(法理学)がゲッティンゲン大学から、それぞれ留学を終えて帰国されました。現在、小田中聰樹教授(刑事訴訟法)がボン大学に、大嶽秀夫助教授(政治学)がハンブルク大学に、水野忠恒助教授(租税法)がカリフォルニア大学に、それぞれ留学中です。今後とも、東北大学法学部は、よい意味での古いアカデミズムの伝統を継承していくことでしょう。

なお、この三月で服部栄三教授(商法)、莊子邦雄教授(刑法)が退官されました。同窓会の皆さんにも懐しいお名前としてお知らせいたします。(昭和五九年四月)



無名会懐古展参観

東北大学名誉教授
東北学院大学副学長

齋藤秀夫

東北大学無名会懐古展が河北新報社の主催で、仙台三越を会場にして一月二十五日から五日間開かれた。昨秋東京でこの催しがあったとき勝本正晃先生に田原音和教授が直訴したのが導火線である。

東北大学を背景に、この誘致をみごとに実現させた河北新報社一力会長のおとこ気も教え子ならばこそである。勝本先生の趣意書は亡き友への追憶と友情に溢(あふ)れて美しい。

展覧された作品は、かつて昭和の初め東北大学に在職された超一流の熊谷岱蔵、阿部次郎、小宮豊隆、原龍三郎、太田正雄、武内義雄、児島喜久雄、勝本正晃の八人の教授が「楊州八怪に因む意氣を以て年数回各家庭、宴席等に会合、酒間談笑、疊に腹這し三十分足らず描き或は賛をしたものを各人分与した中、勝本方に残存せるものを表装したもの」であり「当時最年少であった小生も昨年米寿を迎

え、歳月の流れ早きを思い、共に画き楽しんだ故人方への懐古の為此の展覧会を催すこと」になったわけである。

昨秋、東京の展示では、三十二点であったが、仙台では、さらに十八点を加えたほか、登場する教授たちの全集にも収められたことのない、文字どおり本邦初公開の書簡まで展示されたことは、勝本先生の絶大なご好意によるものである。私は勝本先生、中川善之助先生のご指導をいただいたので、思いもあらたに、皆勤して参観さ

せていただいた。勝本先生の代理で初日と千秋楽の二日間、来仙された、お嬢さんの捻子さんは、これらの絵は、なによりも大事なものだ。幼い時から教えられ、父は自分でナフタリンを入れていまして私に話された。

昨年、先生の米寿のお祝いに馳(は)せ参じた折、先生の絵は、少年時代、学校に宮様がお出でになった折、選ばれて展示されたことが話題になり、美人画をかく原画伯の証言により、勝本少年が浅井忠の塾に若き日の安井曾太郎といっしょに通った仲間であることがわかった。先生の絵が独特の玄人はだしなのもうなずかれる。民法、著作権法の権威のすばらしい余技。

勝本先生の絵は、十七点にも及

東北大学 無名会懐古展

入場無料



と米寿から昭和初期にかけて、当時わが国を代表する学者として活躍した東北大学の教授たちが折にふれて自由描いた。五十余点を集

ぶが、「木蔭」と題し、男女がベロンチに腰かけて語り合う絵は、特に出色である。賛は、英国詩人であるラルフ・ホジソンである。賛は絵の傍らにかくことは、漢文で書くのが通例であるが、この場合は英語である。その訳は「バビロンの昔より語られしことば」となっている。土居光知さんがホジソンを招いたことなど追想しながら、詩人の深遠な文意に襟を正しくした。

無名会懐古展に展示された画と賛は、一世を風靡(び)した碩(せき)学(がく)のコンビである。賛に書かれた達筆の行書は、私は原田隆吉さんに教えを乞(こ)うて解読した。春の顔がちよっぴりのぞかれたとはいえ、寒さのさなか、碩学の高風を慕うフアンの群れは続いた。熊谷岱蔵先生は結核撲滅の神様である。先生の「鉄線」に小宮豊隆先生の賛「子を兵に召されて二度のかんこ鳥」が記されている。熊谷先生の二人の御曹司が応召され、ご長男戦死のご心境をお察しして立ちすくんだ。拙宅にお立ち寄り願った先生のお姿は、少年時代の私にとって、最初の、かつ唯一の大学教授であり、永くあこが

れの的であった。武内義雄先生の賛は庄巻。私の法文学部助手の辞令は法文学部長の先生から手渡しされた。お嬢さんの小松証子さんと、ありし日の先生を偲(しの)んだ。小宮先生が勝本正晃先生の「ヴェニス」に逢里雨と署名した賛は、流れるごとく美しい。初日に女婿の大東康一君が、千秋楽にお嬢さんのさと子さんが来場されたので、こもごも先生を語り合った。阿部次郎先生も勝本先生の墨牡丹や熊谷先生の「葛の花」にみごとな賛を添えていて美しい。原龍三郎先

生は色紙を出品し、その「ざくろ」に勝本先生が賛をしている。勝本稔子さんのお仲人でもあり、私は勝本先生のお供をして、愛妻家であった原先生ご夫妻のお墓参りをし、お寺で、勝本先生が記念の絵をかき、住職にプレゼントしたことも記憶に新しい。

太田正雄先生の画は多い。私がおききした講演は、切支丹に関するものであった。先生が「日本遣欧使者記」を出した後であった。先生を義兄とよぶ斎藤直一さん(元大阪高裁長官)と司法試験問

題作成のため熱海温泉の裁判所の寮に泊まること再三に及んだが、その折の証言と懐古展を総合して判断すると、木下太郎の親友として与謝野夫妻、平山修などならんで、勝本先生を一枚加えないと画龍点睛を欠くと私は思う。児島喜久雄先生は、しんらつな美術批評で鳴らしたが、絵筆をとって、玄人をうならせる腕前であることは石井柏亭と合作の「紫陽花と蝶」(賛・武内義雄)をみても明らかである。

会場には絵の同好者のグループ

である採光会の写真も飾られ、学生会員と共に、顧問として小林淳男、新明正道、伊沢孝平の三先生、助教の村田潔君(西洋美術)の若さ溢れる姿のほか、講師の加藤成之さんも一緒に写っている。半世紀前の学生は知っていたことだが、加藤さんはエノケンと共に笑いの天国を提供した古川ロッパの実兄である。またある時の画の会場ともなった米ヶ袋の小町谷先生のお宅で、勝本先生が画をかき、小宮先生が賛を書いている写真は、当時の情景を生いきと伝えている。



小橋紙器(株)会長

小橋 一雄 (大正15卒)

東北帝大法文学部時代

五高卒業後、東大か京大に進む考えだったが、亡父から東北帝大に行くよう申し渡された。東北帝大には法科が無いと云ったら、父は、

「一雄は、学者になる気が無いから、仙台に行って、東北の人や風物に接して来なさい。東北からは、一雄が尊敬する原敬サンや後藤新平、斎藤実と偉い人が出てい

るし、東北人は、九州人に無い特長を持っている。今迄は、四国、長州、九州から指導者が沢山出ているが、数年後には東北から、国の指導者が出て、東北の天下になるかもしれない。一雄は、東京以西に九州は知っているが、東京以北は全然知らないから、在学中、仙台を中心に、東北の風物に接して来なさい……」と云はれたので、

同級生に相談したら、全員反対で、みんなが父に交渉すると云ひ出したので、改めて、父に相談すると、「若し、父サンの云ふ事を聞いて東北帝大に行くなら、下宿の費用、学費の外に、東北の旅行費と、スポーツに必要な金は別にあげるので、どうだ……」と云はれ、そこで考えてくれる父の意思は尊重せねばならないので、仙台行きを決心した。

* * *

大正十二年春、東北帝大法文学部の第一回生として入学したら、間もなく、法文学部々長佐藤丑次郎先生から、法学部長室に呼ばれ、

まず、学生委員をする様命ぜられ、更に、陸上競技部の創立と、グラウンドの整備の為、業者と連絡をとる様命ぜられた。

同期生は八十有余名で、大半は社会人となった人、軍人では退役少将の小松サン、陸大出身大佐の中村サン等、オヤジみたいな人が居て、高等学校からストレートに入学した者は、河出書房をやった河出君と私を含めて数人にすぎなかった。

そのオッサン達は、学生らしく若返りしたい気持から、私の学生委員としての活動を歓迎してくれた。大演習の時は、学生委員とし

て、サーベルをつつての御手伝ひを命ぜられ、又、学生に關係ある国か県の行事には御手伝ひさせられる事が多く、勉強どころでは無い忙しい学生生活だった。

法文学部は、二高の校舎を引継いだ關係で運動場も二高から引継ぎ、法文学部の陸上競技場として整備する事になった。

一年の時は、小樽高商から来た高橋次郎君と私の二人しか選手が居ない為出場を棄権し、二年の時は、松本高校から万能選手の飯沢重一君が入学し、竹田行雄君、倉沢修之君、蓮池公咲君外数人の選手が出来て、理学部に勝って第三位となった。翌三年の時は更に優秀な選手が増加し工学部にも勝って、医学部の次の第二位となった。

◎女学生關係の思ひ出

私は、一、二月の雪の中から練習をはじめて一年中練習をしていた為、色が黒く、女学生達からは黒くて恐い学生と云はれていたらしい。然し、同級の故熊山 敵君（二高出身の仙台人）の家へ遊びに行った時、たまたま、同君の妹の友達と一緒にあって、歌ったり、トランプをして遊んだ為、恐い学生でなく、愉快な学生と見なほさ

れたのは嬉しかった。

同期の赤塚勝次君が教師のアルバイトをしていた清水小路の女子職業専門学校の校長サン（朝鮮総督をされた斎藤実閣下の妹サンと聴いていた）に、女生徒のテニスと陸上競技リレーのコーチをしてくれと頼まれた。当時は、昨今とちがって、男女の交際がうるさかった為、女学生に接近出来る私が、友人達からねたまれた。

女子職業の生徒は、女学校を卒業した人達だから、年齢も多く、男性の友達がほしい年配だった關係もあって、日曜には、私の下宿に遊びに来たがったし、又、私と散歩に行きたがった。然し、校長の信頼に対しても軽卒な事が出来ない私は、一人でなく、数人で遊びに来る様命じた。

それを知った大学の友人達も、女学生と遊びたいので、何人か押しかけて来た。私は、連中が間違ひを起さないようにと願ひ、女生徒は四時頃帰らせ、友人達にはビールをすゝめて引止める事にした。然し、後に聴いた話だが、それほど注意しても、私がヌケていた事がわかった。それは、大学生と仲よくなった一人の女生徒は、私の

命に従って一応四時に帰ったが、男の方が、ビールを飲んで帰る迄、別の場所待ち、二人仲良く連れ立って歩いていったそうだ。全く、私はオンチの見本みたいでガッカリした。

◎乗馬の思ひ出

陸上競技の槍投げが私の本職だったが、次は乗馬で、五高時代、熊本騎兵聯隊で正式の単独教育を受けていた關係上、大学の講師都富佃先生（五高先輩で乗馬の名人）の御伴をして、仙台憲兵隊の馬で遠乗りをしていた。冬は、スキー、スケートのウインタースポーツをしないで、仙台附近の山又山、或は、平原の雪の中を走り廻ったのは実に愉快だった。然し、或る大雪の時、後方の都富先生から呼び止められ、馬と共に後方に廻転した為、右側の仙台女子学院の校門を出て来た女生徒に、ドロドロのドロ雪をバサッと蹴散らしてひっかけ、キャットと云ふ勢に馬も驚いて止まり、私も、馬から飛び降り、大学の制帽をぬいで、女生徒達に平身低頭謝った。あとから、それを見た友人に、イヤット云ふほどヒヤカされた。後日、仙台の同窓会に行った時、其場所を

探したが、すっかり街の様子が変化した為、仙台中の何処だったか分からなくなった。

◎テニスの思ひ出

テニスは好きでやってる程度だったので、女子職業校長の御依頼を辞退したが、それがかへって校長は好感をもたれたらしく、更に、赤塚君を通じて、重ねての御依頼があつた為、本チャンを一人助手に使用する事を願つたら、「貴方が良いと認めた学生サンなら結構です……」と許され、工学部の本チャン某氏を助手として連れて行く事にした。相当時日を経過していると、校舎の一角から女の悲鳴が聴こえた。私は助手がいないばかりでなく、選手も一人居ないのに気がつき、半分、心配の気持ちで声のした方向に飛んでいった。机、椅子を教場の一方にかたづけ、ピンポン台の置いてある部屋から男女の声がするので、その部屋に飛び込んだら、助手が女生徒にキッスしようとしてゴタゴタやっていた。私は、助手の襟首をつかんで広い場所に引きずりだし、二、三度ブン殴り、助手を止めてもらった。それから自分、助手な

してコーチしたが、骨がおれた。女生徒達からは英雄扱ひされて恥かしかつた。

数ヶ月してから 助手の下宿の前を通つたので、一寸会ひたくなく立寄つたら、部屋の入口に女の靴がぬいであるので、一寸妙に感じたが、「今日は……」と声をかけ部屋の戸をあけたら、過日の、女子選手が仲良く話しているの、驚かさされたが、「このあいだは、いたいめにあわして失敬した……」と云つて、話し合ひ、帰りに助手を呼び出し「こんな事とは知らなかつた、彼女とは真面目な交際をしているんだね……」と云つたら、「卒業したら、結婚するつもりだ」と云つたので、その言葉を信用して別れた。

卒業後、彼が彼女と正式に結婚し、大崎の拙宅の近所に生活しているのを聴いて、何とも云えない喜びを感じると同時に、私も無料な男だったなと感しさせられた。

◎ 楽しかった学園

法文学部の学生時代は、学生も少なく、先生も若い方が多く、教室以外では、御一緒にテニスやキヤッチボールを楽しみ、時には、会食を行つて一杯飲みながら懇談

を行ひ、実に楽しい学園であり、幸せだった。これが、今日の「三日会」を誕生させた大きな誘因だったと思ふ。

私としては、法文学部々長佐藤丑次郎先生の命で学生委員をしたり、三年間、陸上競技部のキャプテンとして、大学内の対学部試合や、運動会の世話役をさせられ、又、大学の経費で、当時の世界オリンピックの優勝選手シヨルツ（短距離）、ミーラ（槍投げ）とも一人の三名を招聘していたとき、近県の高校生を呼んでコーチを受けた事は実に有意義だった。

そんな関係で、各学部のキャプテン及び選手諸君との交友が多く、当時、工学部のフィールド選手松前重義君（現在東海大学々長）とも同郷の関係もあつて特に親しくなつた。

又、前述の様に、男女の交際がやかましかつた時代に、女子職業専門学校や、県立高女の女生徒達と交際出来た事は、当時の学生としては実に楽しい思ひ出となつた。それも、これも、法文学部々長佐藤丑次郎先生が真の学者で、又立派な御人格の先生であられた事と、故中川善之助先生、故鈴木義

男先生、故広濱先生、勝本先生、その他、優秀な先生方の御指導と御加護の御蔭で、有意義であり、

又、楽しい三年間の学園生活を送らしていただいた事を、心から、感謝申上げる次第である。

同窓会総会報告

東海林 恒 英

昭和五十八年同窓会総会は、十一月二十五日仙台市内青葉通の仙台シティホテルで開催された。東京との隔年開催が定着し、また恒例で宮城支部総会も併せて開かれた本総会には、約七十名の会員の参加があつた。

定刻六時、佐藤唯人幹事司会の下で第一部総会が開会され、広中俊雄同窓会長の挨拶、津軽芳三郎宮城支部長の祝辞に続いて、広中会長が議長となり議事が進められた。議事の要領は別掲の佐々木尚介事務局長の報告に譲ることにして、昭和五十七年度本会収支決算が承認されたあと、昭和五十八年度事業計画並びに会費値上げ、会則改正案が夫々説明され、いずれも満場一致で可決、決定をみた次第である。

※

これにより長年懸案とされてきた本会経理上の問題も一応解決することとなり、同窓会員名簿の作成などの事業活動も進展がはかられることはご同慶にたえないところである。

議事に引き続き、本会事務局幹事長を担当され多大の貢献された前法学部事務長、松田正芳（現東海大法学研究所室長）、半沢高良（現歯学部事務長）の



両氏に会長から感謝状と記念品が贈呈され、両氏から丁寧な謝辞が述べられた。

続く第二部は同時開催の宮城支部総会で、前回の総会以後の会務の報告が事務局からなされた。

第三部懇親会は八島淳一郎幹事の司会で賑やかに開会され、先輩後輩打ちまじっての和やかな雰囲気の中に交歓が深められた。

なお来賓として服部栄三教授のご臨席を頂いたことと、懇親の最中ではあったが、東京支部前事務局長の杉雅夫氏が出席され、挨拶をされるという場面もあり、盛会のうちに開きとなった。

(昭和33卒・宮城支部事務局長)

支部だより

岩手支部

佐藤 良知

近来にない異常寒波のため、盛岡地方の桜も、例年であれば五月の連休前に終わってしまうのですが、今年は、連休明けになってようやく満開となる状況でした。

さて、当岩手支部の会員も四十年代後半から増えはじめ、昨年の



総会時点で事務局が把握しているところでちょうど百人となりました。毎年六月に総会を開催し、併せて懇親を深めているところです。

総会には、毎回、三十人程の会員の出席があり、岩手県の各分野で活躍している諸先輩を囲み交流を深めているのですが、残念なことには、出席者の大半が昭和三十年代以前卒の会員で、四十年代・五十年代卒の会員の出席が極めて少ないことです。

五十八年度の総会は、昨年七月二日、盛岡市の料亭「田中」で開催されました。関文香支部長(昭

8卒、岩手大学名誉教授)渡辺武副支部長(昭13卒、岩手日報社相談役)はじめ三十二名の会員が出席、昭和五十七年度決算の承認等の議事のあと懇親会に移り、近況報告、懐旧談に花を咲かせ、盛会裡に散会しました。

なお、本年度の総会は、若い層の会員の出席率を高める一助にもなろうかと考え、最近続いた料亭での開催からパーティ形式にし、六月二十三日、盛岡市内の「ホテル東日本」で開催する運びとなりました。今年度は、任期二年の役員の改選等の議事が予定されており、その後懇談会で交流を深める予定です。例年にない多数の会員の出席を期待しているところです。

(昭和35卒・岩手支部事務局長)

職場だより

風通しのよい職場に

若い力

秋田県庁

伊藤 千鶴子

秋田県庁は、秋田市の「霞が関」

とも呼ばれる官庁街山王大通りに面している。ペーじゅ色六階建本庁舎三階の第一応接室のレースのカーテン越しに、向かい側市役所前広場のパンジーに埋まった花時計が、ゆったり時を刻むが見える。時は春、日はあした、あしたは八時三十分。以下架空VTR。

〃月曜の今朝、第一応接室では定例の「朝の会」が始まった。知事佐々木喜久治(昭19)を中心に左隣は副知事丸山完(昭25)。出納局長新林利夫(昭27)が丸テーブル斜め向かい。福祉保健部長席には出張不在の部長に代り次長成田哲朗(昭30)が座る。今日のテーマ「異常低温と県民生活」、「県内不当労働行為の実態」、「県農業短大における留学生のケア」の説明者として、控えの席に、県民生活課長伊藤千鶴子(法30)、地方労働委員会事務局審査課長小野康雄(法34)、農業短大学生課長佐藤虔介(法27)らの顔が見える。

知事が何か冗談を言ったらしく居並ぶ部局長がドッと笑う。冗談の標的にされたI部長も負けずに一矢むくいる——といったところでVTR終わり。なおここには登場しないが、特別職に、地方労

働委員会委員長伊藤彦造（昭28）
弁護士が重みを加えている。

昭和五十四年初当選時、佐々木知事が職員に要望した第一点は、「風通しのよい職場づくり」であった。特定の取り巻きをつくらないうという知事の公正な姿勢は、二期目の現在も貫かれ、同窓だからという安易なもたれ合いはない。

しかし、五、四九九名県職員と同様、本学出身者一四四名は知事に全幅の信頼と支援を寄せ、特に農三七名に次ぐ法三六名は、ひそかに「オヤジ」と同じ学部であるという誇りを胸に、県政推進力の中核となるべく各分野で全力投球している。

自治研修所で事実上研修のキャップを努める参事高崎幸一（昭35）、青少年婦人課で秋田県婦人生活史編さんの大事業に取り組む参事小峰（旧姓島津）アイ子（昭31）は、その創造的な仕事ぶりが評価されている。行革がらみで公社のあり方などにメスを振る新設の首席審査員室付の審査員佐藤博身（昭41）は庁内同窓会の幹事長役。

本県では、全学の同窓会が昭和五十年に結成され、二年に一度総会を開催している。法学部支部は

これより古く昭和三十九年に結成し、経済と合同でこれまで毎年開催されているから、顔を合わせる機会は割と多い。その他県内同窓会ゴルフコンペも知事を中心に恒例となっている。しかし、全県単位の催しは、どうしても熟年先輩（筆者もその部類？イイエ、花も盛りのつもりですが……？）の存在感が大きく、若い人たちの出席率が低いという声もある。

このため、県庁内同窓会は、若い人たちの感覚で運営して欲しい、という丸山副知事の意向もあり、部局ごとに若手の世話人が出て、企画、進行一切を受け持つ。主任以下の会費三千円というのもうれしい。（その他五千円以上）。そのまじめに走り回っているのが文書広報課主任加藤慎一郎（昭47）
商工課主事河辺実（昭50）。スピーチは、その年のフレッシュマンが必ず指名される仕組みである。

今年も法出身三名（智田邦英・嘉藤正和・須田広悦）を迎えた。五十四年の四名（嵯峨良章・相場哲也・梅井一彦・藤井英雄）をピークに、石油ショック以降毎年確実に二―三名の俊才が難関を突破

入庁してくるのは誠に心強い。法三六名のうち、昭50以降採用は二三名、実に六四パーセントを占めているのである。今は内外共に厳しい時期、これら若い力が活力あふれる秋田県政を将来に向かって支えてくれることを期待したい。

（昭和30卒・県民生活課長）

七萩会のつどい

—— 七十七銀行

佐藤 信義

七十七銀行の行員のうち東北大卒業生で構成する親睦会は、七萩会と名づけられている。その名は七十七銀行の「七」と、宮城の萩の「萩」を合成したものである。七十七銀行の本店は、青葉山に通じる五月の新緑美しい樺並木のある青葉通りと、東二番丁の交差点にある。昭和五十二年九月、創業百年を記念し新築された十四階のビルである。

七萩会の会員は、昭和五十九年卒の新会員、七名を含め総数一五一名にも達している。うち法学部出身者は三十六名である。したがって卒業学部別の人数からみると経済学部出身者が圧倒的に多い。

別の見方をすれば、法学部卒業生は、学生時代に法学専門教育をうけたその特性において貴重な人材群を形づくっているといえよう。

七萩会の会長は、小畑清氏（昭和二十八年法学部卒、常務取締役）である。同時にわが法学部同窓生の最長老でもあって、何事につけ後輩の良き理解者、相談相手としてご指導をいただいているところである。

当行の法学部卒業生の入行年度別の構成をみてみると（カッコ内は、東北大学卒の合計の数）、昭和三十九年度卒までが十九名（六十四名）、昭和四十年代卒が八名（二十三名）、昭和五十年代卒が九名（五十八名）となっている。法学部出身者の半数以上が入行二十年以上の銀行マンとして、営業から管理までの幅広い業務において指導者として活躍しているわけである。

右の数字から分るように、三十九年卒までの卒業生の数と比べ、それ以降の年代の卒業生の数が少なくなっている。先輩が後輩に、いわば学窓の絆として恩師の名前を、憲法の清宮、民法の中善、刑法の木村……と呼び合い、話題の

はずむことがむずかしくなっているだけに日頃の交流が必要となっている。

七萩会の年度の定例行事としては、新人会員の歓迎会と一泊の移動総会とがある。特に総会では年度の全同窓生が顔を合せあえる機会である。歓談安楽の場となり、心まかせのトリンケンとなる。

金融機関をとりまく環境は、金融の自由化、資本の自由化とますます厳しさを増している。法学部の各自も、論理、分析、判断という身についた(身につけさせられた)特性を活かして頑張っている。

(昭32卒・七十七銀行調査部)

同期会だより

首都圏同期会

幹事 玉城・桜庭

学制改革の直後に入学し、制度が固まらぬまま、教養部二年間は昔ならつたことの焼直し授業、学部二年間は旧制最終組と合乗り授業、卒業はその旧制最終組と同時に大変な就職難、やむなく留年する同僚も出た新制第一回生も、い

まや全員五十才を超え、学校出てから三十年となりました。

写真は五十八年七月九日に、連続三回目の首都圏同期会をサンルートホテル東京で開いたときのもので、卒業後三十年を記念して全国に呼びかけたところ、仙台はいうに及ばず、福岡、大阪、日立、秋田からも参加して、総勢二十三名の盛会となりました。

会長を大東京火災海上保険(株)の小坂伊左夫副社長にお願いして



年に一度、皆の無事を確かめながら、学生時代に立ち返り、仙台にいた気分でおダを上げる楽しい同期の集いです。

本年度よりの 会費値上げについて

事務局長 佐々木 尚介

わが同窓会は昭和三十四年に創立されてから、丁度二十五年となりました。会員の数は増加の一途を辿り、第一回生から本年三月までの卒業生総数は九六一五名になりました。そして今なお元気な第一回卒業の先輩はじめ多数の優れた人材が各界に活躍しておられます。これは、喜ばしい限りであります。

この様なすばらしい諸先輩にお会い出来たり、また懐かしい同期生との再会、そして未来の担い手となる後輩との出会いなど同窓会の果す役割は大なるものがあります。そしてこの同窓会の運営には会員の皆様の熱意とご協力が何よりも必要なものであります。

現在同窓会の運営経費は会員の皆様からの会費のみでまかなわれて居ります。近年この必要経費がますます増大し、極力削減の努力も空しく限界に近づきました。

この原因は第一に支出面では、会員数の増加に伴い、母校事務部の余暇を利用しての事務処理の応援ではまかないきれず、専任職員、アルバイト、外注の動員などの必要度が増大したこと

更にその他の諸経費の値上がりも看過ごせない影響を与えて居り、特にこのなかで郵便料値上げによる部分が大きいこと等であります。第二に収入面では、新卒業生の終身会費の納入率が近年特に高くなって居り高齢化社会の到来によって、今後ますます収支バランスの悪化が予想される状態となつていることがあげられます。

このため昨年度理事会の承認を得て、昭和五十八年度同窓会総会に、**年会費貳千円、終身会費貳万円**とする会費値上げの議題を上程いたしましたところ、満場一致で可決され、昭和五十八年四月一日より実施することに決定致しました。

会員の皆様にご報告申し上げると共に、どうか右の趣旨をご了解賜り、会費納入につき格別のご高配をお願い申し上げます。この会報に同封して会費の納入依頼書及び振替送金用紙をお送り致しました。今すぐご送金のご手配をお願い致し度く存じます。

お詫びと御礼

昨年会報発送のとき終身会費の一部の方に誤って振替用紙を同封しましたところ、若干の方からご送金がありました。本来ならご返金申し上げますでしたが、厚かましくご寄付にとお願いいたしましたところ、殆んどの方から心よくご承諾を賜り、寄付扱いとさせていただきます。大変有難うございました。お詫び傍々御礼を申し上げます。

事務局